

秋田城跡 第114・115次調査の概要

秋田市立秋田城跡歴史資料館

1 調査要項

所在 地：秋田県秋田市寺内地内

調査主体：秋田市

調査担当：秋田城跡歴史資料館

調査期間：第114次調査 令和2年4月27日～8月21日 調査面積：257 m²

第115次調査 令和2年8月17日～10月28日 調査面積：242 m²

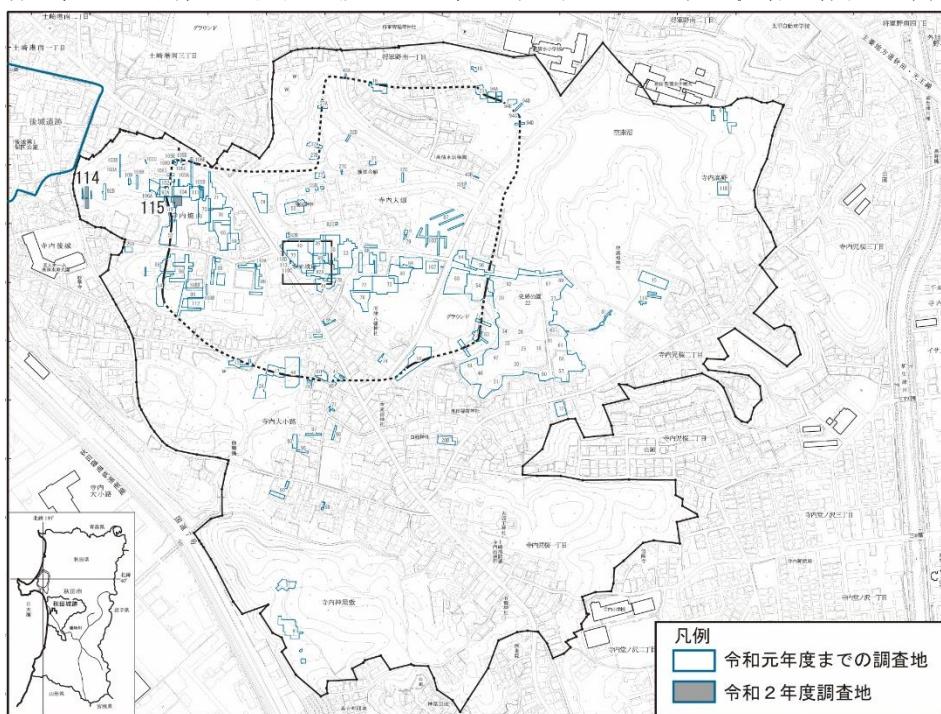
2 第114・115次調査地および周辺の概要について

(1) 調査の目的と調査地の概要（第1図）

令和2年度の発掘調査は、焼山地区北西部の2箇所を調査対象として実施した。

第114次調査地は、焼山地区北西部、西側に伸びる尾根上地形の下方にあたり、周辺調査では外郭西門跡や門、城内外西大路の存在が確認されている。また、中世の墓域や土壘と門などの遺構が存在したことが確認されており、城外西大路の位置と実態の把握、ならびに当該地域の利用状況を把握することを目的に調査を実施した。

第115次調査地は、焼山地区北西部にあたる。周辺の調査では、外郭西門へ延びる築地塀および材木塀と、その外郭西辺区画施設と別れ、北東に延びる布堀り状溝の存在が確認されてい



第1図 秋田城跡発掘調査位置図 (S=1/10,000)

る。また、北側に隣接する第 104 次調査地でも南北方向の材木塀が検出されており、これらが一連の区画施設であるか確認し、年代や変遷を明らかにすることと、周辺の利用状況を把握することを目的に調査を実施した。

(2) 第 114 次調査の発見遺構について（第 2 図）

調査の結果、今次調査地の旧地形は、東から西へ下る傾斜面であり、中世や近世から現代にかけての削平や盛土などにより、現状が段状の地形となっていることが確認された。主な遺構として、溝跡 3 条、土坑 13 基、集石遺構 1 基、道路遺構 1 面が確認された。各遺構は第Ⅲ～Ⅶ 層面で検出されており、出土遺物などから第Ⅲ～Ⅳ 層は中世から近世にかけて、第Ⅴ 層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。

① 中世以降の利用状況の変遷

今次調査で検出された遺構で、最も新しいと考えられるのが SX2570 集石遺構である。調査区中央北側の第Ⅲ 層面で検出されており、直径 4 m の円形範囲内に直径約 5 cm～12 cm の礫が集中して確認されている。深さ 6 cm～24 cm で円形に掘りこまれており、埋土に大量の礫が混入している。この礫の中から、一字一石経であると考えられる墨書が確認される礫が出土している。切り合い関係にあり、それより古い SD2558 溝跡から寛永通宝が出土していることと合わせ、近世以降の仏教関連遺構であると考えられる。

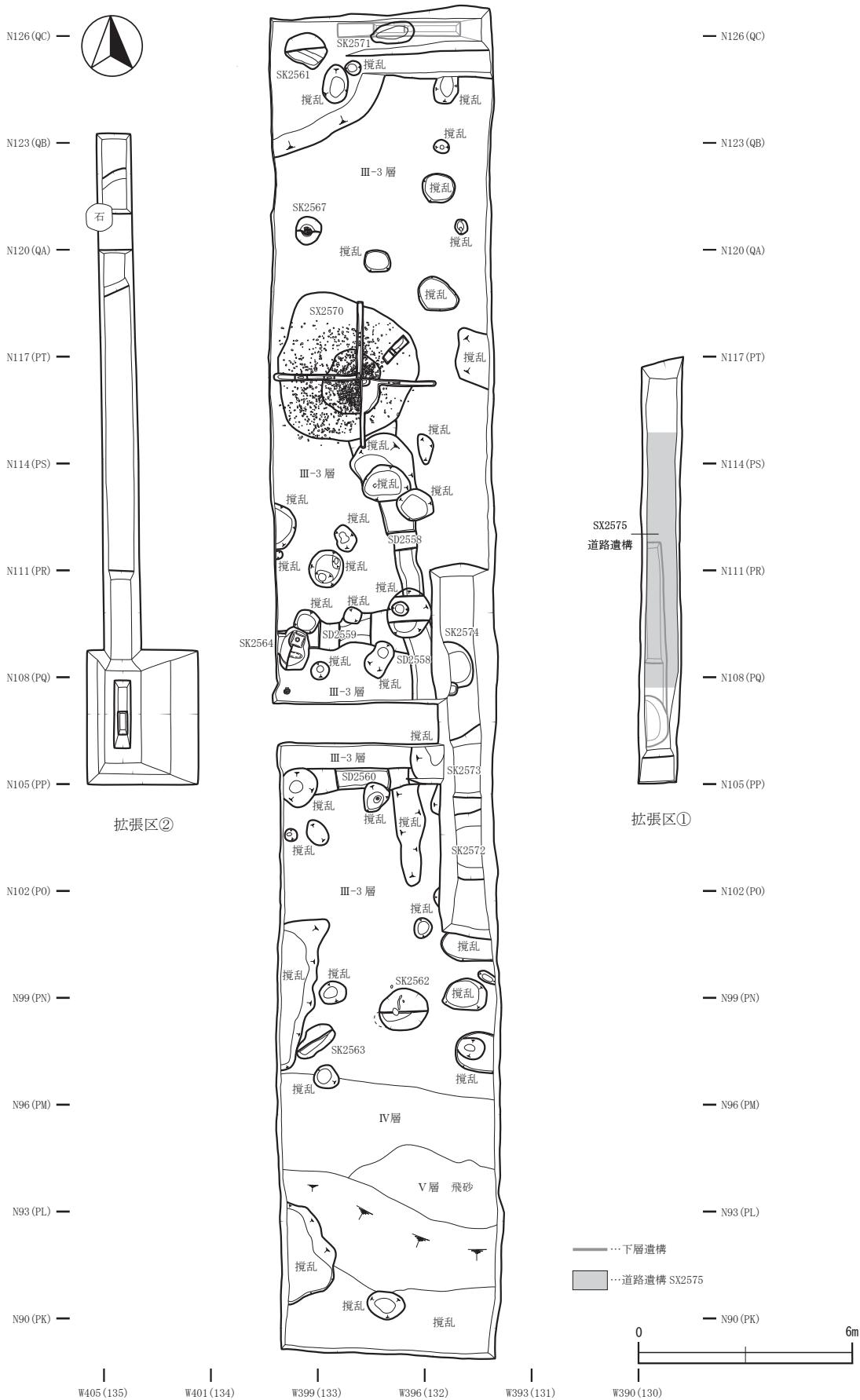
次に、今次調査で確認された土坑類 SK2561～SK2569、SK2571～SK2574 については、いずれも骨片や埋納銭と考えられる模鋳銭が確認されていることから、土坑墓であると考えられる。上層の土坑墓には火葬骨片が多量に含まれており、模鋳銭の銭種が限定されているのに対し、下層で検出された土坑墓については、火葬骨片の出土量が少なく、木棺のような遺物が確認されていることや、模鋳銭の銭種について幅があるという差異が確認された。また、文献資料によると今次調査地付近に 14 世紀後半から 17 世紀初めにかけて、大悲寺が存在していたことが記されており、これら土坑墓類は寺院に関係する遺構であると考えられる。つまり、中世から近世初頭にかけての墓域としての利用において、2 時期の段階があることが考えられる。

出土遺物として、12 世紀後半の珠洲系陶器片や 13 世紀の瓷器系陶器壺が出土していることから、遺構等は検出されなかったが、中世前期に、この地域の利用が遡る可能性が考えられる。

② 城外西大路の変遷について

古代の遺構として、SX2575 道路遺構が検出されている。これは外郭西門から延びる城外西大路の延長部分と考えられる。今回の調査や過年度調査に成果により、城外西大路が外郭西門から東へ延びる傾斜が緩やかな尾根筋を下り、西側の後城遺跡へ向かっていくことが確認された。

道路遺構は硬化面からなり、第Ⅶ-1 層面と第Ⅶ-2 層面の 2 時期が確認されている。道路幅は下層面道路が 7 m、上層面の道路は下層の路面に南側の補修拡張部を合わせると 7.2 m であり、はじめに第Ⅶ-2 層が造成された後、補修等の目的をもって第Ⅶ-1 層が造成されたと考えられる。道路遺構の年代については、上層および下層の出土遺物の年代などから、下層道路が 8 世紀前半の創建期、上層道路が 8 世紀後半の外郭Ⅱ 期以降と考えられる。さらに過年度調査



第2図 第114次調査地下層面遺構全体図

において、尾根上方で確認されていた城外西大路の年代観が、外郭Ⅰ期およびⅡ期のものと、外郭Ⅲ期のものであることをふまえると上層道路については外郭Ⅲ期のものである可能性が考えられる。



第3図 秋田城跡基本構造関係位置図

(3) 第115次調査の発見遺構について

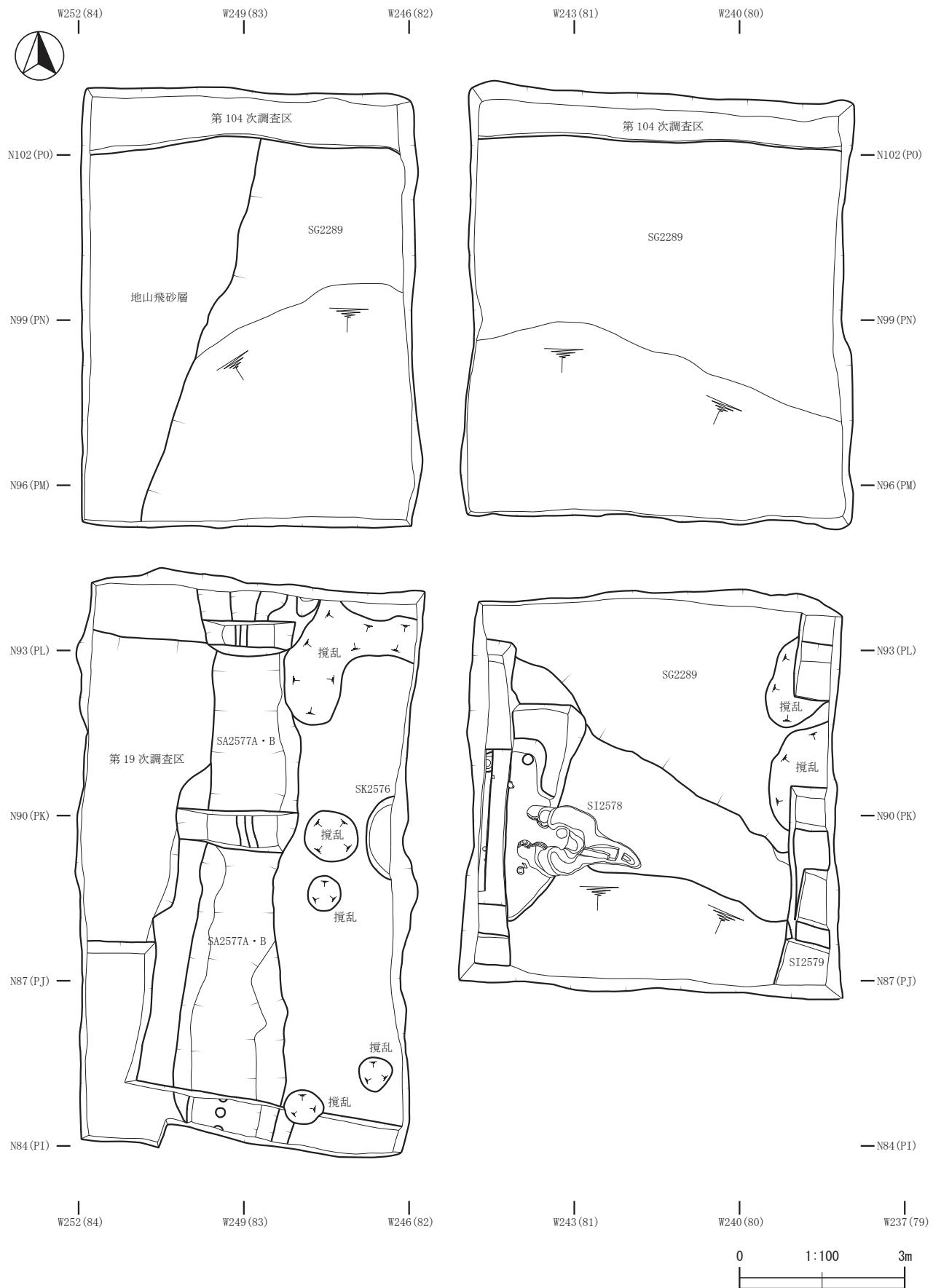
調査の結果、調査地北側では、第104次調査でも検出されていた近世の大きな土取り穴(SG2289)により、古代の包含層や遺構面が大きく削平されている状況が確認された。また、調査地の南側においても中世の整地や、近世以降や造成や耕作の痕跡が確認されており、古代の遺構面は大きく削平を受けていることを確認した。旧地形は、北から南へ低くなる傾斜面であったが、現況は近世以降の耕作に伴う造成や、近現代の削平により、北から南へ段状に低くなっている。主な遺構として材木塀1条、竪穴建物跡2軒、土坑1基が検出された。各遺構は第IV～VII層面で検出されており、第IV層は中世以降、第V層以下は古代に造成された整地層であると考えられる。

①利用状況の変遷について

中世以降については、今次調査において遺構は確認されていないが、第IV層のような中世整地や14世紀以降の遺物が検出されている。また周辺調査においても14世紀代と考えられる遺物が確認されていることや、文献資料においては、16世紀後半の安東氏による湊合戦において、「寺内の砦」をめぐり合戦が行われた記載があり、今回検出された中世整地や遺物は、この地区的利用がそれ以前に遡ることを示唆している。

古代の遺構については、SA2577A・B 材木塀跡が確認されている。調査区南西の10世紀中葉段階の整地層と考えられる第V層面で検出された南北方向の材木塀跡である。幅1.7m～1.9m、長さ10m以上、深さ50cm。北で10°東に振れる。材抜き取り跡や一部に丸太材痕跡が確認されていることから材木塀の布堀り溝であったと考えられる。布堀りの堀り方に新旧2時期確認され、南側は調査区外に延び、南北方向にさらに延びると考えられるが、北側はSG2289土取り穴によって大きく削平されている。

最も古い遺構は、SI2578 竪穴建物跡と SI2579 竪穴建物跡である。これらの竪穴建物跡は出土遺物や検出層位から8世紀後半の遺構と考えられ、建物の方位や年代観により、一定の規格性を持って配置されたと考えられる。住居の年代は外郭Ⅱ期にあたり、当該時期においては、



第4図 第115次調査地遺構全体図

外郭西門の城内側の利用が活発になったと考えられる。

②外郭西門周辺の外郭区画施設について

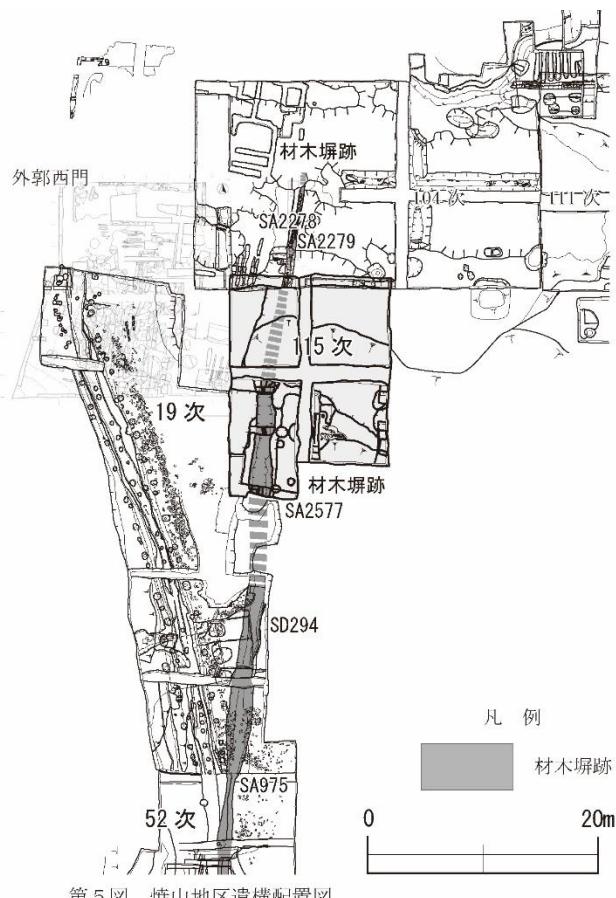
10世紀中葉遺構に造成された区画施設について、詳細を検討していく。今次調査において確認されたSA2577A・Bについて、104次調査で確認されたSA2278・SA2279と、19次調査で確認されたSD294に連なる一連の遺構であると考えられる。SA2577AがSA2279と、SA2577BがSA2278と接続する。SA2577Aが構築された後、SA2577Bが構築されている。最終的には丸太材を抜き取られ、機能を停止している。埋土に差異が少ないとから、短期間に内に立て替えが行われていると考えられる。

検出された層位が10世紀中葉の整地層であることから、それ以降の遺構であると考えられ、秋田城跡外郭区画施設の終末期にあたると考えられる。過年度調査の結果から、城内大路を横断する形で構築されていることや、外郭西門と接続しない方向に延びることから、外郭区画施設とは別に城内側を区画していると考えられる。今回の調査や104次調査の結果から、秋田城跡の終末期において外郭西門の東側が南北方向により簡略化した区画施設としての材木塀によって区画されていたことが把握された。

4. 令和2年度調査の成果と課題

調査の結果、第114次調査については、中世から近世にかけては火葬墓等の宗教関係遺構を確認し、墓域として利用されている状況を把握した。古代については、奈良時代から平安時代にかけての城外西大路に關係する道路遺構、整地層を確認し、外郭西門から尾根を下り西側の後城遺跡方向へ向かう道路の位置関係を確認した。今後はこれまでの調査成果と合わせ、城外西大路の変遷と方向性について構造を含めた総合的な検討が必要であり、また中世の利用状況についても総合的な利用状況と変遷の把握が必要である。

第115次調査については、過年度調査地にて検出されていた区画施設と連なる位置関係にある材木塀跡を確認し、外郭西辺の城内側に併行する区画施設の年代と位置等を把握した。他に周辺が、8世紀後半に竪穴建物跡が営まれて、居住域として利用されている状況を確認した。



第5図 焼山地区遺構配置図